

港区を2メートル持ち上げる！ ～世紀の盛土工事～

戦前の港区は、大阪市最大の人口を誇るめざましい発展を遂げましたが、一方で工場・ビルなどの地下水の過度の汲み上げによる地盤沈下がひどく、区内では昭和10（1935）年から19年の10年間で1メートルを超える沈下を記録した場所もあり、このため高潮などの水害にたびたび見舞われていました。

昭和20（1945）年の大阪大空襲で港区は壊滅的打撃を被り、終戦直後の枕崎台風による高潮がさらに追い打ちをかけました。戦後、復興に向けた動きが進められるなか、地盤沈下による高潮などの問題を根本的に解決する対策がとられることになりました。すなわち、港

湾の復興整備として安治川を拡幅して内港化する工事とあわせて、この工事により大量に発生する浚渫土砂しゅんせつを使って、区内の低地全面に2メートルの盛土を施すこととされたのです。

工事は昭和23（1948）年に着手されました。

着手からまだ日も浅い昭和25（1950）年、ジェーン台風が来襲。またも大きな被害を出しましたが、その中で、盛土が完了していた地区は高潮被害を



盛土に使う土砂を搬入
（八幡屋バス停前、昭和32年）



盛土の横を通る、軌道かさ上げ前の市電
（港晴付近、昭和32年）

免れ、全面盛土工事の効果が実証される形となりました。それまでは、住民からは盛土工事に反対する声が強かったのが、これを機に工事の促進を切望する声が高まり、順調に工事が進むようになりました。

盛土とあわせて、建物や道路、市電軌道のかさ上げが行われました。特に当時、交通の主役であった市電は、一日も運休することができず、運行しながらのかさ上げとなったため、細心の注意が払われました。

こうして行われた盛土は、港区域790ヘクタールのうち493ヘクタールに及び、世界でも類を見ない、壮大なプロジェクトとなりました。すべての盛土工事が完了したのは、着手から20年近くを経た、昭和42（1967）年のことでした。

（写真は、港区・山田昌次様 提供）



盛土後の路面高に合わせた
下水道マンホール（市立運動場
（現八幡屋公園）付近、昭和32年）